わたしの挾間史談

大分市　坂本勝信

一　菊地氏の台（うてな）城祉

昭和四十七年頃のことです。熊本県の菊池神社の宮司さんからお話を伺う機会がありました。

その話の中で豊後大友氏との戦いの歴史についても触れられ、菊池本城址から七城町方向に数キロはなれた場所に当時対大友氏防衛のための砦跡がある、と聞いたので行ってみたことがあります。当時のわたしの歴史知識は、学校教科書の範囲しかなく、郷里の豊後の守護大名が大友氏であったことぐらいしか知りませんでしたので、豊後から肥後に侵攻した歴史をはじめて知りました。

当時対大友氏防衛のための砦というのは「台城址跡」という一本の標柱が打ち込まれた木々に覆われた小高い丘で、北側の大分県方面からの山岳地形が菊地市のある平地地形に地形が変換する肩部に位置し、当時の大友侵攻軍が平地作戦のため戦闘展開するのを妨げる役目をしたと思われました。現在大分から阿蘇市や一宮に抜けるのが幹線道路であり、その当時の豊後から菊地へはどんな経路だったのか、その時ひとつの興味がわいたものでした。それから四十年が経過した今、史談会で、挾間氏が対肥後作戦時は、小野屋で陣を張ったことを聞き、小野屋から菊池に至る当時の経路について大変興味を抱いています。わたしのこれからの研究課題のひとつです。

二　高良山

佐賀県内勤務中の昭和五十年に、縁あって地元の女性と結婚したのですが、その結婚式の来賓祝辞で「古来肥前と豊後は犬猿の仲、豊後の肥前いじめの歴史のなかで本日の組み合わせ、おおいに結構…」と、ある方が述べられました。へぇー、いじめた歴史ねぇ、とその時ふと頭をよぎったのが高良山のことでした。

久留米市の東、耳納山系の西端に高良神社がありますが、神社よりちょっと東側に、今ではツツジの多い公園で、甘木方向が一望できる場所がありますが、ここで南北朝時代懐良親王をいただいた菊地氏が大宰府（少弐氏）軍と戦ったいわゆる太刀洗の合戦で菊池軍が本陣を置いた跡地です。昭和四十八年、当時私は久留米で一時期を過ごしていたおりに、南北朝戦史の現地研修として高良山に登った折、高良神社付近が、豊後大友氏の肥前竜造寺氏攻略の本陣跡と聞いたことがあったのを思い出しました。

佐賀県内の民芸に「面浮立」というのがあります。大分地方にはない、異様な面をかぶり、鐘や太鼓や笛の音に合わせて舞う民芸ですが、大分地方にある神楽殿でのお神楽とは違ってお宮の境内などの広場で舞われます。この民芸も大友氏と関係がありました。元亀元年の役のおり、佐賀城が大友軍に取り囲まれあわや陥落というある夜、竜造寺軍の鍋島信昌がそれぞれ異様ないでたちをした一群を率いて大友軍に夜襲をかけ、驚いた大友軍は破れ、これがきっかけで佐賀平地から退いたという今山の夜戦というのがその民芸の始まりとの事でした。この戦に挾間氏がはたして参戦していたのか大変

興味があります。

三　小説にみた豊後史

「九州三国志」

図書館で借りて読んだもので、作家名の記憶はありませんが「九州三国志」という本に出会って、薩摩島津軍の狭隘地を利用した鈎野伏の兵法を用いた戦いに若い時分大変興味を持ちました。豊後の地では戸次川の戦いもそうでしたが、作者はこの兵法ひとつで竜造寺氏を島原に葬り、大友氏も破り、九州を席巻した島津氏が秀吉の軍門に下るまでを描いた小説でした。残念ながらこの小説に挟間氏は登場しませんでした。

「炎の軍扇　立花道雪」

九州文学同人の西津弘美氏のこの小説に出会ったのは平成十年、「本書は、二十年の歳月をかけて、九州の知将・立花道雪の生涯とその人間像を描いた労作」という評論家の推薦帯をみて読みました。大友氏の家老格の戸次鑑連、豊後藤北の鎧ケ嶽城で生を受けた戸次家十四代目、山内氏との前線を立花山（福岡県糟屋郡新宮町）で担任し、のちに秀吉の島津征伐以降、大友氏の碌からはなれ、柳川の地に立花藩祖となる立花宗茂の義父（宗茂は秋月の高橋紹運の長男で道雪の一人娘の入り婿）となった人である。この小説の中にわずか二行、元寇の役の大友家への特別功労として「三男の大友能康には野津原を、四男の大友直重には挟間の地を与えた。後に両名は拝領した地名から野津原と挟間をなのることになる」との記述を見出しました。大友氏領地内を鎌倉幕府が大友氏一族に与えたのか、そのとき以来疑問を抱いています。

「王の挽歌」

平成十二年春、東京上野駅裏、上野公園入り口近くの古本屋でそれとなく手にしたのが遠藤周作氏の「王の挽歌」上下巻、先に読んだ九州三国志がこれには大友宗麟公を主人公として、豊後側の視点で描かれていました。テレビ映画が、高橋英樹の大友宗麟役で、一昨年でしたか放映されました。豊後を主体としたローカル歴史小説への初の出会いでした。

四　最後に

平成十三年に大分県に帰って以来、挟間町史、同各種の文化資料等に接して挟間氏のことをぼんやりと知るようになりました。挟間史談会の末席に加えていただき、豊後大友氏の中で、挟間氏がどんな地位役割を果たしていたのか、どんな戦いに臨んでいたのか、大変興味を持って史談会でのお話を伺ってきました。

昭和三十年、合併により「挟間町」となったおり、私は小学校1年生で、来鉢から徒歩でちょうちん行列に加わったのをかすかに覚えています。おそらく合併時、町名決定の議論の中で、単に中心的な旧挟間村による吸収合併だから町名は挟間町、などという短絡的なことではなく、挟間氏の業績も遡って論議されたことではないかとも推測しています。

江戸時代で寸断され、確たる挟間氏資料が不足の中での史談も楽しいものです。